

孤独のトイレ

PAPER DRIVER

第一話 ブックエース日立鮎川店

俺は大学の授業、空いている三限目と昼休みを利用して、徒歩で近所の本屋へと足を運んでいた。生協の弁当で膨れた腹を抱えながら、今日発売されたはずの雑誌に心を躍らせる。

大学と本屋の間には一本の橋があつて、その下を川がとうとうと流れている。欄干から下を覗くと、目も眩むような高さがある。川の底は、橋の下では非常に浅くなっている。もしここから落ちれば頭が割れて死んでしまふだろう。

この町の名前の由来であるこの鮎川は、鮎と名が付く以上、鮎が棲んでいるらしい。それは本当なのだろうかと伯父に聞いたところ、存在するという。にわかには信じがたい。それなら俺は夏の間中、この鮎川で鮎を釣つては食っているところだ。

そういえば、とある漫画である人物が「鮎は内臓もおいしく食べられる。植物を食べているからだ」という趣の発言をしていた。俺は個人的にこの台詞が大好きである。その理由はそれがこと食欲をそそる話題であるのみならず、その直後に「人は肉を食べるからまずい」というやや乱暴な論理がどことなくおかしさを誘うからだが、考えてみると虫をたくさん食べている魚と植物をたくさん

食べている魚とでは、どちらの内臓を食べたいかというところは「植物に決まってるよな」

内臓を食べるといふことはその糞も食べるわけで……。それが虫か植物かと聞かれればなんとなく植物に傾いてしまうのは仕方が無いことだ。

もちろん虫が体に悪いとか思っているわけじゃない。タンパク源として非常に良質であることも知っている。

「でも芋虫とかカブトムシみたいのを食えって言われたらなあ」

苦笑して、俺は鮎川が下に流れる橋を渡った。それから上り坂を越えていけば本屋はすぐそこだ。

小さなクレール屋さんの前を通つて二つの自動ドアを抜けていく。目の前には文芸書のコーナーがあつて、そこから右手の方に漫画雑誌のコーナーがある。立ち読みしている男たちの間をすり抜けて、俺は雑誌を掴んで立ち読みを始める。しかしいくらページを捲つても目当ての漫画を見つけない。おかしいな？

目次を確認する。ちゃんと掲載されているのを確認し、次に掲載ページ数を。なるほど、セクターカラーだから前の方に載っているのか。

ページ数を確認しながら雑誌を繰っていくと、いとも簡単に目当ての漫画を見つけないことに成功する。

「しかし目次のページを確認すると見つけれられるのに、ただ適当に捲っていると見つけれられないのは何故なんだろうな」

雑誌を元の場所に戻して、俺は更に店の奥、漫画の新刊コーナーを指す。一通り目を通してめぼしいものは無いと確認すると、踵を返して「でも、このまま帰るのもナンだな……何かもつたいない気がする」

この本屋は本屋と同時にレンタルビデオやCDなども取り扱っている。俺の足は自然とレンタルビデオのコーナーへと向かう。

レンタルビデオのコーナーはひどく空いている。しかし、この店には半額の日があつて、旧作、新作を問わずレンタル料が半額になるのだ。その日になると近所の中高生や主婦が一気に押し寄せて上手くいえないが凄いとになる。

俺は洋画の新作コーナーを歩く。が、一向に借りたものに会わない。当然だ、別にDVDを借りようとして来たわけではないのだ。

「でも『せっかくだから何かアニメでも借りていくかな』といいつつも俺は特別アニメが好きではない。好きではない。下手をするとここ数年テレビアニメを見たことが無いかもしれないというくらいだ。だからかえって、久しぶりにアニメを見ようと考えたのかもしれない。

「そうだ！『おおきく振りかぶって』だ。『おおきく振

りかぶって』を借りよう。

おおきく振りかぶって、とは『ひぐちアサ』の野球漫画を原作としている。俺は特別野球好きなわけではないので、従って野球漫画も好きではない。そんな俺が五月あたりに『おおきく振りかぶって』にはまってしまったのは作者である『ひぐちアサ』の前連載作品『ヤサシイワタシ』にひどく感銘を受けたからである。

『おおきく振りかぶって』は野球の好きではない俺でもすんなりと読めた。まず投手である主人公が俺の読んだ漫画、いや本の中では凄まじく弱気で卑屈で泣き虫であるのが新鮮であり、加えてそんなどうしようもない主人公が投げる球はどうしようもなく遅い。しかし彼にはストライクゾーンを縦三つ、横三つで区切った計九方向に投げ分けるといふ地味な特殊能力があり、それを駆使して強豪のバッターから三振を取ってくるのはとても気持ちが良い。久しぶりに良い漫画を読んだ気がした。

「たしか『おおきく振りかぶって』は去年アニメ化されていたはずだ！ それを借りよう！」

なんだかウキウキとした気分だ俺はアニメのコーナーで『おおきく振りかぶって』を探した。割とすぐに『おおきく振りかぶって』自体は見つかつたのだが「ああ、駄目だ。一巻から三巻まで借りられてしまっている」

うーん、どうもタイミングが悪いな。そう思ったときである。

「うっ！」

下腹部から突き上げられるような痛みが襲い、瞬く間にそれが全身に広がっていく。

いかん、腹が痛くなってきた。

だが慌てることは無い。この店にはトイレがあるのだ。位置はレンタルビデオのコーナーの脇である。

慌てることも恥じることも無い。俺は腹が痛いだけなのだ。トイレで用を足したいだけなのだ。だからといって狭い店内で走るのはマナーに欠ける。トイレへ駆け込むのではない、あくまでも向かっていくのだ。それが俺の流儀だ。

加速していく腹の痛みには耐えながら、俺はトイレのドアを開ける。しかしそこには信じられない光景が。

「ああ！ 大のトイレが使われている！」

なんとということだ。この男子トイレは小便器は二つあるが大きいほうは一つしかないんだぞ。困ったなあ、どんだん腹は痛くなってくるし、かといって本屋の前のコンビニのトイレへ行くのも間に合わない。このまま待つしか方法はないのか。

いや！ まだ手はある！

俺は男子トイレを出て障害者用のトイレを見据える。

このトイレは基本的には障害者専用のトイレである。

しかしあくまで基本的には、なのだ。つまりのんびんだらりと今日はここで用を足そうという人間はお断りの場

所であるが生憎俺は今、緊急事態だ。ともすれば地球に巨大隕石が接近するくらいの緊急事態である。ならば許される！ 許されるはずだ！

俺はスライド式のドアの取っ手に手をかけた。ドアを開けると洋式トイレが見える。ドアに鍵を閉め、ズボンを下ろし、トイレへ倒れこむように着席すると俺は勢い良く排便した。

「ふう」

用を足してしまうと、改めてトイレ全体を見回す余裕ができた。

障害者用トイレは普通のトイレに比べて極めて面積が大きい。これは車椅子を使う人を考えてのスペースだと思われる。左手の方には何故かベビーベッドのようなものが設置されており、なるほど赤ん坊連れの人間にも配慮がなされているようだ。これを見る限り絶対に障害者限定のトイレでもないらしい。

右手には洗面器があつて、洗面器の鏡は通常の鏡と違い、大きくかつ斜めに設置されている。これもやはり車椅子を使う人を考えての角度と大きさなのだろう。

「それにしても用を足したあとなんか心臓がドキドキした気がするな」先ほどの腹痛に緊急事態と騒いでいた自分がバカらしく思えるよ……。流石に巨大隕石接近は大げさか、ハハハ。
……。

……。

だが果たして本当に大げさなのだろうか？

この町、いやこの市、この国にどれだけトイレがあるのだろうか。人は常に、どんなときでも腹痛の危機に晒されている。だからこそ訳の分からないいたくさんの薬が販売されているわけだが、それでもなお、なんの前触れもなく腹痛が痛くなる瞬間は存在する。そしてそれを予測できる人間は、おそらくそう多くは無い。

現に俺だってさっきまでアニメや漫画のことを考えていたのに、今は入ったことも無い特殊なトイレの中にいる。

腹が痛くなったとき、すぐそばにトイレがあること、すぐトイレにいける状況であること、それは地球に巨大隕石が衝突するくらいに奇跡に近いことではないか？

いや、やっぱおおげさだな。

俺は尻を拭く。

「なるほど、紙はこういうタイプか」

ズボンをはいて、手を洗い、本屋を出た。空は明るく、腹は心なしかとても軽い。もう次の授業が始まる時間だったが、俺は極めてゆつくりとした歩調で大学へ向かった。

第二話 水戸駅

土曜日の午前七時、俺は多賀駅で水戸駅行きの電車を待っていた。多賀駅はホームが二つあるだけのとてもシンプルな駅である。しかし季節はもう冬の、駅の早朝は寒い。なんの遮蔽物も無いホームの真ん中で立っていると気絶してしまいそうだった。

こんなところで死にたくない。自動販売機で暖かい紅茶を買う。ところで何故、自販機の暖かい飲み物は手で掴みづらいほど熱いのだろうか？俺は自他共に認める生粋の猫舌であるが、それ以上に手が熱さに弱い猫手でもある。そんな俺に熱い缶やペットボトルを掴めというのは、それは残酷すぎるよ。

さて前述した通り猫舌である俺は、ある一定の温度まで下がるまで缶を頬に当てたりしてカイロの代わりにする。案外、なまじ飲み物として使用するよりもこうした使いの方が、役に立っているような気がしなくもない。アナウンスが鳴る。

二番線に上り列車がまいります……。

休日の午後は電車が非常に空いている。俺は早速シートの上隅に身を寄せると、イヤホンをつけてMP3を起動した。

多賀駅から水戸駅まではちよつとした旅である。時間

にすると三十分あまりだろうか。多賀駅から大みか駅、東海駅、佐和駅、勝田駅、ときて水戸駅がくる。全部で四つの駅を突破して初めて目的地に辿り着くのだ。

「と、言っても俺はただ座っているだけなんだけどね」MP3から流れている曲は『ザ・シルバーケース』。直訳して『シルバー事件』。これはとあるアドベンチャーゲームのメインテーマだ。シルバー事件というゲーム自体、非常にスタイリッシュでもとて気に入っている。

あらずじを説明すると主人公は日本を基にした架空の国家『カントウ』の新興都市『24区』の警察特殊部隊であったが、第一話で特殊部隊はたった一人の被疑者相手に壊滅。同じ警察の一部所『凶悪犯罪課』に配属されることになる。刑事ドラマのように一つの事件を一話完結で描いた作品だが、全編を通して二十年前に二十四区で発生した伝説の殺人事件『シルバー事件』とその犯人『ウエハラカマイ』の謎がキーとなっている。

グラスホッパーマニファクチュアという会社の開発したこのゲームは一九九九年に発売され、現在では入手困難となっており、俺も三年かけて中古のゲームショップを巡ってようやく見つけた。現在ではPSアーカイブスで配信されていて、有料ダウンロードすればPS3もしくははパソコンでもプレイできる。

曲が終わって、次は『F・S・R』が流れる。

これもグラスホッパーマニファクチュアの開発したゲ

ームの音楽だ。シルバー事件とちがって歌付き。ゲームの名前は『花と太陽と雨と』。F・S・RというのはFLOWER, SUN, AND RAINの略で、ゲーム中に登場するホテルの名前でもある。このゲームはシルバー事件とは打って変わって南国のリゾートアイランドをテーマにしており、プレイすると本当に南の島へ行った気分になる。その最たるものが最後に飛行機に乗って島を離れる瞬間で、あの夏休みの終わった後に似た、なんともいえない寂しさが俺の胸を締めつける。

このゲームのあらずじを言ってしまうと主人公『モンドスミオ』は探し屋という変わった職業の男で、南の島『ロスパス島』唯一のホテル『花と太陽と雨と』の支配人『エド・マカリストアー』の依頼でロスパス島の空港に仕掛けられた爆弾を探す話だ。

ラストシーンの解釈は非常に難しく、未だに俺も理解できない。二〇〇一年にPS2発売されたこのソフトは、今ではニンテンドーDSに移植されて発売されている。ただしPS2に収録されていた歌は削除されて、変わりに新しいBGMに挿し変わっていたのが残念だった。

そうこうしている内に電車は大甕に辿り着き、それから東海へ向かおうとしていた。俺は座席にうずもれて、音楽を聴きながら、電車の窓から、外の風景を、眺めて、

いた。

「あつ」

思わず立ち上がって、対岸の窓辺へ駆け寄る。通り過ぎる林の影、青いオブジェがそこに現れる。

大みかマンモスだ！

誰が作ったのかわからないが、大みかと東海の間には巨大なマンモスが存在する。もちろん本物ではない、その証拠にマンモスは青かった。何故か電車の中から見える位置でそれは存在する。一度たまらなくなつて大みかから電車を降りて間近でマンモスを眺めたことがある。驚いたことにマンモスだけではなく、恐竜を模したわけのわからない怪物がその周辺に数体存在した。

大みかと東海と比べて大みかに近そうなので、俺は彼らを大みかマンモス、及び大みかサウルスと呼んでいる。どれも作りは非常にチープで、マンモスの体毛は青いビニールテープ製である。よく見るとビニールテープには茶色い塗料の跡が確認でき、おそらく元々茶色かったのが度重なる風雨のブリーチに晒されて脱色してしまつたのだろう。泣ける話である。

だが一体、こんなもの誰が作ったのだろうか？

大みかマンモスを目撃して俺は再び座席に腰を沈めた。それからぼんやりとしながら再び音楽に耳を傾け、時を待った。東海の次は佐和、佐和の次は勝田、勝田の次は……。

それは勝田駅を発進した直後に起きた。

お腹が疼く。疼きは次第に痛みに変わり、痛みはそして重さへと変化していった。

「ああ、腹が痛くなつてきた……」

先ほどまでぼんやりしていた俺の思考は今、驚くほどクリアだ。腹が痛くなると何故、こんなにも頭が覚醒するのだろうか。そしてどうして勝田駅で停車している間に俺のお腹は痛くなつてくれなかったのだろうか。全く俺の腹は不幸者である。人間はこんなところで用は足せんのだ。警察に捕まつてしまう。少しは考えて欲しい、と小腸、大腸、十二指腸に言うには無理がある。彼らは何も考えない、ただ食べ物から栄養を吸収して排出することしか頭に無い。頭は無いけれど。

とういうことは、だ。内臓は自律神経系でありコントロールできない以上、それは野生の獣と同じなのではないか？ 言い換えれば自分の意思で操作できる、手、足、目、口、呼吸、と自分の意思で操作できない心臓、腸、脳内物質とは同じ人間の体内か、その一部でありながら

全く別の生き物と言えるのではないか？

もちろんこの二つの生き物の目的はとりあえずは生きること、で合致している。そもそも自分の意思で操作できない自分は意思を持つ自己に隷属している。

だがただ二つ、意思を持たない自己が反乱を起こす機会がある。それが空腹と排泄だ。

次第に痛みは大きくなってくる。困った。今からトイレ付きの車両に移動しようにも、用を足している最中に水戸駅に止まったら困る。

俺は外の風景を見る。水戸に着くまでそう長くは無いはずだ。

が、しかし。

「え？」周りの風景の流れる速さが「なんだって？」とどんでん「どういうことだ？」遅くなっていく。

電車が減速している。

なんとということだ！

時刻表にあわせるためか、電車は駅近くで減速するところがある。

運転手は正気か？ こんな近くまで来て減速するなんて。きつとこの電車を動かしているのは人間じゃない、悪魔だ。

姿勢が尻を少し浮かせて中腰になる。口からは念仏が

自然と流れた。ナンミョーホウレンケーキョー、ナンミョウホウレンケーキョー。

これは祖母がよく仏壇でなにかしらの言葉とともに唱える決め文句だ。祖母は敬謙な仏教徒で、一日に三回くらい仏壇の前で祈っているのだが、そういうえば宗派を知らない。決め文句からするとやはり法華経だろうか？

「うゝ早く駅についてくれゝ」

余計なことを考えるとますます腹が痛くなってくる。腹痛を超越するには無我の境地に到達する必要がある。心を空にして、呼吸を整え、時間を意識せず……。

ようやく水戸駅に辿り着く。勝田からここまで、まるで無限のように思えた。水戸駅は多賀駅などと比べて広い駅である。都会的である。具体的に駅の塗装、綺麗さ、設備とは別に……そう、何か空気が違う……。

腹痛を抱える俺だが、周りの人間に怪しまれないように平然と電車を降りて、人ごみにもまれながら階段を登った。俺は人間である。恥知らずな内臓に屈して無様な姿を他人に晒すわけにはいかない。幸いにも駅に着くころには（トイレが近くにあるのを内臓たちが本能的に感じ取っているためか）腹の具合も大分落ち着いてきた。階段からトイレまでは遠くない。

俺は歩調速くトイレに向かい、個室トイレのドアを指さそうとしたが「なんてことだ」

トイレの前には数人の列が発生している。平日の早朝

に比べればたいしたことは無いが、腹痛を抱えて列に並ぶのは辛い。他にトイレが無い以上、ええいままよ！俺は列の最後尾に進んだ。

全く、なんとってこんなに人が大勢いるんだ。

恨みをこめて俺は個室トイレを呪む。

さっさと出る！俺は腹が痛いんだ。腹が痛くてたまらないんだ。

しかし、三つの個室トイレの内、誰も出てくる気配が無い。

おかしい、時間がかかりすぎる。ズボンを下ろして用を足して、紙でお尻を拭いて、またズボンを履いて出てくるのにそんなに時間がかかるものなのか？きつとトイレの中で新聞や漫画を読んだりケータイをいじっている奴がいるに違いない。最低だ。並んでいる人たちのことも考えろ！

「うっ！」

また腹が痛み出した。トイレが間近にあるのに用を足せないんで、内臓たちが怒ってるんだな。

「うう、本格的に痛くなってきた……」

腹を押さえる俺だったが、不意にとある考えが脳裏をよぎる。

待てよ、俺だけが痛いわけじゃない。このトイレに並ぶ全員が腹を痛めているんじゃないか？

俺は前を並ぶ数人を見やる。スーツを着たサラリーマ

ン風の男、制服を着た学生、私服の男。

この人たち、みんなきつとお腹が痛いのに平然としている。それでも自暴自棄にならずにじつと我慢してトイレの前に並んでいるんだ。

「そうだ、俺だけが痛いわけじゃないんだ……」

俺の心を妙な連帯感が包んだ。すると腹の痛みもなんだかいつまでも耐えられるような気がした。

今、トイレに入っている人たちだって、望んで用を足しているわけじゃない。もつと良いタイミングで用を足したかったはずだ。きつとトイレに入る前は電車の中で、もしかしたら俺以上に苦しんでいたのかもしれない。

水の流れる音が聞こえる。ついでズボンを履く音、ベルトを締める音。一人、個室トイレから姿を現す。入れ替わりに列の先頭の人がトイレに入っていく。どんな人間でも、死ぬときとトイレで用を足すときは一人なのだ。ゆっくりと用を足してください。俺はいつまでも、出てくるまで待つてますから……。